

広大から海外へ留学している若手からの便り

米国オハイオ州立大学留学便り

山野 喜 大学院医系科学研究科 薬学分野 生薬学 助教

私は現在、米国オハイオ州立大学 薬学部のLiva先生のラボに留学しています。研究テーマとしては、地衣類から分離した子囊菌類が産生する小分子代謝物の構造決定および生合成経路の解析を行っています。私が所属する研究室は教員1名学生4名の計5名と小規模ですが、アメリカ、マダガスカル、ジャマイカ、シンガポール、イタリアと世界各地から集まったメンバーで構成されており、多様性に富んだ研究室がどのように運営されているかを知る良い機会となっています。こちらの研究環境として特に良いと感じた点は、研究室、教員、職員、学生との垣根が低く、困ったことをすぐ専門家（教員や職員）に質問し、解決をお願いすることができる雰囲気があることです。そのおかげで個々の専門性を全体として効率的に活かした組織ができているように思います。

生活面では、日本に居た頃よりも自由な時間が多く、自分で経験したいことを自由に選択できる環境にあるため、どのような時間の使い方を選択したかが留学生活に大きく影響を与えるように思います。私は英語力の向上と異文化交流のために、ボランティア主催のイベントに数多く参加しています。それらを通してボランティアファミリーや研究室以外の留学生とも深い関係を築くことができ、それぞれの国の個々人の考えや文化の違いを知ることができました。これらの経験が、今後の大学の国際化の流れに対応する上で役立つことを期待しています。

最後になりましたが、このような留学の機会を与えてくださっている松浪 勝義教授ならびに関係者の皆様方に、心より御礼申し上げます。



感謝祭でホストファミリーと一緒に(筆者 左から2番目)

編集後記

新型コロナウイルス感染症の感染拡大によって、さまざまな形で影響を受けられている皆さまに、心よりお見舞いを申し上げます。また、医療、介護の従事者の方をはじめ、感染症治療や感染拡大の防止にご尽力されている多くの方々に感謝申し上げます。感染拡大が終息し、皆さまが不安のない生活を感じられる日が、一日でも早く訪れることを祈っております。今回の世界的なコロナ禍では、各国および国際社会が潜在的に抱えていた問題が浮き彫りになったと思います。今後、世界の情勢や人類の価値観にも大きな変化が予想されます。そうした状況下にあって、日本の大学・大学院においては、国の科学と哲学の教育を行うことができる最高学府として、また、国の学術研究機関として、担っている役割が真に大切ではないかと思えます。

BioMed Newsの第3号の発刊にあたっては、こうした大変な状況の中、新任教授の先生方をはじめ、多くの先生方にご執筆いただきました。末筆ながら、ご執筆と編集にご協力いただいた皆さまに心より感謝申し上げます。

2020年5月 広報委員 河合 秀彦

2020年（令和2年）5月発行

編集発行：広島大学大学院医系科学研究科広報委員会

住 所：〒734-8553 広島市南区霞一丁目2番3号

電 話：(082) 257-5013（霞地区運営支援部総務グループ）

E-mail: kasumi-soumu@office.hiroshima-u.ac.jp

U R L: <https://www.hiroshima-u.ac.jp/bhs>